

第 15 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「アイアン」

神奈川県 公文国際学園高等部三年 原尾 勇貴



賢 治 の ま ち か ら  
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『アイアン』

神奈川県 公文国際学園高等部二年 原尾 勇貴

太陽がメラメラと照りつける砂漠の地は、地獄のようにカラカラに乾いていました。

だからこそ、そこにぼつんと開けた緑の丘は馬の天国だったのです。牧草はすすくと育ち、近くのアシスを水源とする井戸は豊かな水で満ち溢れていました。

喉を潤し腹を満たした馬たちは、頭上をゆったりと横ぎっていく綿菓子みたいな雲の影を追いかけて走り出しました。

風になびくたてがみと飛び散る汗。

バネのように跳ねる四本の脚。

数十頭の馬が、ひだりみぎ、ひだりみぎと調子を合わせて足を繰り出していきます。

茶、黒、赤、灰、白、様々な色の毛並みがギラギラと陽の光を反射します。

馬たちの動きは、ひとつの大きな波がうねるようでした。

このうねりは何者にも止められないように思われました。

しかし丘の端で馬の波は急停止したのです。

群れの後ろにいた馬が止まりきれずに、前の馬の尻にぶつかり悲鳴をあげました。

「なんと、いま美しいイバラだろう」

先頭に立つ大きな黒馬が低くうなりました。

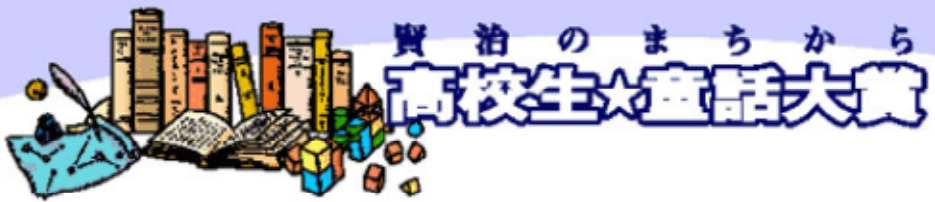
馬たちの前をイバラの垣根が塞いでいたのです。前方だけではありません。

丘の周囲はイバラの垣根にぐるりと囲まれていました。

垣根は高く馬の背ほどもあります。無理に通れば身体中に鋭いイバラのトゲが刺さり身動きできなくなるでしょう。彼らは野生の馬ではありません。

天国のように見えた丘はイバラで固く閉ざされた牧場なのです。

「いっそ、飛び越えてしまおうか」



黒馬が大きな体を揺らして自信満々な態度でつぶやきました。その時、イバラがしゃべりました。

「黒馬さん、およしなさい」

くぐもりながらも金属的で不気味な声です。

驚いた仔馬こらがあちこちで跳ねました。

「なんだ。見張り屋アイアンではないか。隠れていないで出てこい」

黒馬が鋭くにらむとイバラがガサガサと揺れ、小さな黒い影が現れました。錆さびが浮いた赤黒い鉄のかたまり？

いいえ、それは全身に鉄をまとった小さな馬のようでした。背は黒馬の半分ほどでしたが確かに馬の形をしていました。

頭にバケツみたいな鉄仮面をかぶっています。身体は鉄の板で覆われて馬らしい毛並みを見ることはできません。目のあたりにはめられた半曇りはんぐものガラスが表情を隠しています。

アイアンと呼ばれた、その鉄の馬が動くたび、身体のあちこちで歯車くさりや鎖くさりがギシギシガチャガチャと音を立てました。胸には大きな錠前じょうまえがついていて、鍵穴かぎあながくろくろと口をあけていました。

「私は見張り屋ではなく、見守り役です」

「どう名乗ろうとお前は人間の手先だ」

たしかにアイアンは見張り屋でした。

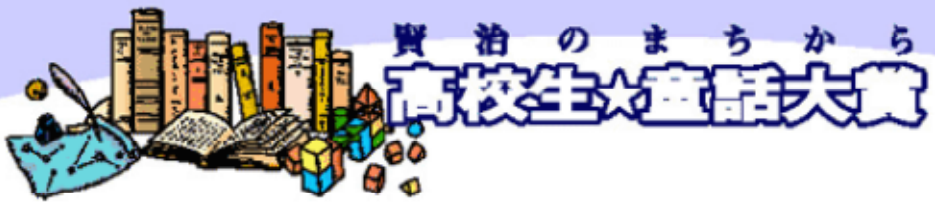
やんちゃな馬たちが垣根の外に飛び出そうとして怪我けがするのを防ぐのがアイアンの仕事なのです。鉄に覆われた体は重く頑丈がんじょうで、アイアンが通せんぼをすれば、どんな馬でも押しつけることはできません。

アイアンがこの牧場にやってきたのはもう何年も前のことです。見知らぬ白ひげの老人が「育ててくれ」と置いて行ったのです。

それ以来ずっと、アイアンは暑い日も雨の日も風の日も、田んぼの力カシのように馬たちを見張り続けてきたのです。

「黒馬さん、垣根を飛び越えようなんて無茶です。イバラで怪我をしたら大変です。大体、あなたはもうすぐ『出荷』じゃないですか」

アイアンの主人である牧場主は、育てた馬を定期的にごこかへ『出荷』していました。



「俺は『出してもらいたい』のではなく、『出ていきたい』のだ。外で自由に走りたいのだ」

「黒馬さん、私は外の世界を見てきました。鉄皮のおかげでイバラの垣根で傷つかずに通れますからね。外は灼熱しゃくねつの砂漠で牧草もろくに生えていません。まるで地獄ですよ」

黒馬の取り巻きの馬たちが「ここも地獄のように退屈だぞ」とやじをとばしました。

「アイアンよ。人間が鉄を使った戦争で大地を枯らしてしまったのだ。土地が砂漠になるのを食い止める植物の種も足りないのだ」

アイアンは「鉄」と聞いてびくんと体を震わせました。「アイアン」という名前は「鉄」という意味です。自分が責められている気がして胸がどきどきしました。

「だがな、お前の足でどこまで見たと言うのだ？ 俺ならば砂漠の先まで見て来るがな」

アイアンには返す言葉がありませんでした。

彼は重い鉄を着こんでいる為、馬なのに牛のような速さでしか動けないのです。

「とにかく私は皆さんのことが心配なのです」

「ふん、俺は知っているぞ。お前は、百頭の馬が『出荷』されれば自由になれるのだろうか？ お前が見張り屋をしているのは、俺たちの為でなく自分のためというわけだ」

「！」

アイアンは驚きのあまり絶句ぜっくしました。確かに牧場主から『馬百頭を出荷すれば胸のカギをくれてやる』と約束されていたのです。

「さあ、アイアン。俺たちのことを本当に思うなら、鉄の身体でイバラを踏み倒すのだ」

黒馬がのしかかるような圧力で迫ります。

「そ、そんなことはできません」

「ふん、まあいい。仔馬が怪我をしないのはお前の見張りのおかげかもしれないからな」



黒馬はもう一度「ふん」と鼻を鳴らすと身体を翻して走って行っていました。他の馬もそれに続きます。沈む夕日に溶け込むように走り去る姿は大変美しいものでした。

「いいなあ、私も皆のように力いっぱい野原を駆けてみたい」

アイアンはため息をつくとき、赤錆びた自分の胸に空いた鍵穴を覗き込みました。

「こんな鉄皮など、早く脱ぎ捨ててしまいたい。でも、それで速く走れるのだろうか」

アイアンの足は鉄板と歯車で補強されているため、非常にゆっくりとしか動きません。

その状態で長いこと固められた関節は、もう素早く動かせないかもしれませんが。

「そしてもしも速く走れなかったら、よろいを外した私は何の仕事が出来るのだろう。ああ、本当の私が何者なのか知りたい」

日が沈む頃になると、アイアンはいつもそうしたもの悲しい感情に駆られるのでした。

その晩、馬小屋に小さな客が訪れました。

「アイアン、起きているかい？」

前髪をきれいに揃えた人間の子供です。

「坊ちゃん、ベッドを抜け出したのですか」

アイアンが坊ちゃんと慕う少年は、牧場主の一人息子でした。体が弱く学校にも通えず、アイアンだけが話し相手だったのです。

「アイアン、ごめんね。僕が黒馬に話してしまっただよ。アイアンとお父様の力ギの約束を。それで苛められたのなら僕は悲しいよ」

坊ちゃんの瞳は少し潤んでいました。

「坊ちゃん、私は慣れていきますから」

「鉄皮を脱いだらアイアンも『出荷』されて伝書馬として活躍できるはずなのにね」

「伝書馬……馬の郵便屋とは面白いですね」





「うん、うちの馬は足が速いから評判がいいとお父様に聞いたよ。いつも不足気味で高値で売れて儲かって仕方がないそうだ」

実際は隣国との戦いで伝書馬が足りなくなっていたのですが、二人は無邪気に牧場主の言葉を信じていました。

「アイアンも胸のカギを開けて伝書馬になりたいだろう?」

「でも坊ちゃんを一人で残せやしません」

それを聞いた坊ちゃんは肩を震わせ、コホンと小さな咳をしました。

「僕はきつとこの牧場から一生出ることはないだろう。体が弱すぎるからね。でもアイアン、君は外に出ていくべきだ」

そう言った後、坊ちゃんは、今度は激しくゴホゴホと咳込みました。

「大丈夫、アイアン。心配しないで。亡くなったお母様から受け継いだ体質だから咳をするたびにお母様を思い出すんだよ。アイアンはお母様を憶えているかい?」

「私をこの牧場に連れてきた白ひげのおじいさんのことはぼんやりと覚えています」

アイアンを置いて行った老紳士は足まで届く長いひげを生やし、スコップのようなハンマーのようなネジ回しのような不思議な工具を担いでいたといえます。

「ああそくだ。アイアン、背中がかゆいって言っていたよね。僕がかいてあげるよ」

そう言うと坊ちゃんはアイアンの背中をこぶしでトントンと叩きはじめました。

「ああ、坊ちゃん。気持ちがいいですねえ」

坊ちゃんが叩いていたのは、アイアンの背中を覆う鞍のような形をした鉄板でした。

その真下の部分が、しょっちゅうむずがゆくなってアイアンを困らせていたのです。

「木に背中をこすりつけてはどうだい?」

「私の鉄の背中では、木が傷ついて枯れてしまうでしょう。可哀そうです」



「ここらは木の数が少ないからね。隣の国には砂地でもよく育つ植物があるらしいけど、仲が悪いから分けてくれないそうだよ。仕方がないからアイアンの背中は僕がずっとかいてあげるよ」

坊ちゃんは少し悲しげにも見える表情でアイアンのひんやりした鼻を撫なでました。

「おい、アイアン、いるか！」

その時、馬小屋に深刻な顔をした牧場主が乗りこんで来ました。よほど悔しいのか皺しわだらけの顔をさらにクシヤリとしかめています。

「ご機嫌ななめようですね」

「当たり前だ。牧場で最も上質な商品が逃げちまいやがったんだからな」  
聞いた瞬間、黒馬の精悍せいこんな姿がアイアンの脳裏に浮かびました。

「黒馬さんですね」

「ああ、そうだ。アイアン、あの馬を連れ戻してこられたならこいつをくれてやる」

そう言って牧場主は赤茶色い工具のようなものを掲げました。先端に小さなでっぱりがいくつもあります。

「お父様、それはー！」

「ああ、大分前だが、ひげのオヤジがアイアンと一緒に置いて行ったものだ」  
牧場主が握っていたものはアイアンの胸の錠前を開ける鉄の力ギでした。

アイアンの胸が高鳴りました。力ギの実物を見るのは初めてだったので。

「坊よ、お前が持っている。アイアンが黒馬を連れ戻したら、窮屈きゆうくつな鉄皮を外してやれ。なにせ黒いやつで百頭目なんだからな」

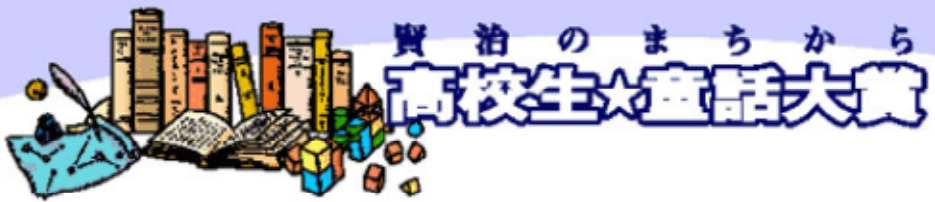
そう言って牧場主は息子に力ギを放りました。受け取った坊ちゃんは戸惑いの表情を浮かべてアイアンを見つめています。

「黒馬さんを必ず無事に連れて帰ります」

「よしっ、それでこそ鉄の馬アイアンだ」

牧場主は満足げにうなずきました。

深い海の色をした空に星々がポツリポツリと遠慮がちに光っています。強い満月の光の下、アイアンは黒馬を追ってずんずん歩いて行きました。砂粒が顔に当たるのも厭いとわずに、いくつもの砂丘を越えていきました。



首を懸命に振り、ガチャガチャとやかましい音を立てて走る鉄の馬がおかしいのか、砂漠へびの馬鹿にする声が耳に入ります。

「阿呆あほうだね。偽ぎのブリキ人形が頑張ったところで本物の馬にやなれるはずがないのにさ」

アイアンは情けなくなりました。こんな鉄皮を着ているせいで、二セ馬扱いいされるとは。

アイアンは悔しさを振り払うように首を振り、駆かけ続けました。

しばらく走ると、アイアンは砂丘の向こうから馬のいななきと馬蹄ばていの音を聞きました。

黒馬ではないかと、音の方へ飛び出したアイアンは奇妙な行列に出くわしました。

金モールで飾られた赤いピシツとした服に身を包み、胸にたくさんのバツチをつけた人々です。大きな馬にまたがった彼らは、肩に長い棒のようなものを担いでいました。

心細かったところで人に会ったアイアンはつい嬉たすしくなって訊ねました。

「この行列はお祭りですか？」

もちろん、祭りのはずがありません。

金モール服の男たちは隣の国の軍人でした。アイアンは攻め入ってきた敵部隊の行軍の前に飛び出してしまったのです。

「うっ、あれは鉄軍馬だ。撃て！ 撃て！」

軍人達の持っていた長い棒、つまりはマスコット銃が一斉に火を噴はきました。

弾丸が、アイアンの全身を叩き甲高い音を立てました。貫通はしなかったものの音に驚いたアイアンは慌ててその場を逃げ出しました。

「あの鉄軍馬め！ どこに隠れた」

「隊長、鉄軍馬とはなんですか？」

砂もくに潜ひそって息を潜めてるアイアンの耳に軍人たちの話が聞こえてきました。





## 賢治のまちから 高校生★電話大賞

「戦争の為に鉄の鎧よろいをまとった馬だ。かつて我が国の主力であったが、設計技師がこの隣国に脱走したのだ。隣国にも砂漠に強い植物の種を分け与えるべきだなどとほざいてな」

「では、その鉄軍馬を追いますか」

「いや、かまうな。我らが戦争に勝つためには、第一目標である伝書馬の牧場を焼き払う必要がある。いくら倒しても新たな伝書馬が次々と送り込まれてきてはキリがないからな」

そして軍人たちの声が遠ざかるのを待ってアイアンは身を起こしました。

センソウ……しかも軍人たちは坊ちゃんのいる牧場を襲うつもりのようです。

急いで牧場に危険を伝えなければなりません。アイアンが全力で走れば、皆を避難させるのに間に合うかもしれません。

「だけど……」

アイアンはショックを受けていました。自分が天国だと思っていた牧場は、世界中の木を枯らしたセンソウに手を貸していたのです。見張り屋をしていた自分も同罪だと言えるでしょう。そして最も大きな衝撃は、自分がセンソウの為の馬だったという事実でした。自分が何者かは分かりましたが、それはあまりに残酷な正体だったのです。

自分も、あの牧場も、地上から消え去ってしまった方がいいのではないかと思えました。

呆然ぼうぜんとしてふらふらと彷徨さまよったアイアンは気が付くと開けた場所に出ていました。

砂丘に囲まれた小さな泉は静かに水をたたえていました。のぞきこむと美しい月が大きく映りこんでいました。

「このまま泉に入ってしまうのか」

アイアンが惹ひかれるように水面すいめんに顔を近づけた時、どこからともなく優しくも厳ひびかな声がアイアンの心に響ひびいてきました。

「自らのつとめを果たしなさい」

驚いたアイアンはあたりを見回しました。

しかし誰もおらず、月の冴え冴えとした光がアイアンを優しく包み込むばかりです。



「ああ、お月さんなのですね」

アイアンは、泉に映りこんだ月に思わずお辞儀じぎをしました。

「アイアンよ、そこで何をしている」

「黒馬さん」

アイアンに鋭く呼びかけたのは黒馬でした。

「牧場が危ないようだが知ったことか。俺は世界の果てまで走るぜ。お前は  
どうする?」

アイアンの心は決まっていました。

「私は……牧場へ戻ります」

黒馬はやれやれといった表情をしました。

「そうだな。お前はずっと見守り役だからな」

月が照らす中、二頭の馬はそれぞれ反対方向へと別れていきました。二頭とも甲乙つけがたい物凄いスピードで、どちらが黒馬でどちらがアイアンか分からないほどでした。

牧場の人々と馬たちは、砂丘を三つほど越えた盆地に避難していました。

アイアンの急報で危機を逃れていたのです。

「アイアン、ありがとう」

アイアンと向き合う坊ちゃんの手には、あのカギがありました。黒馬を連れ戻さなかったと駄々をこねる父親を説得してアイアンを自由にすることにしたのです。

「さあ、アイアン、君は自由だ」

坊ちゃんはアイアンの胸に差し込んでいたカギを勢いよくひねりました。

ガチリと音がして、アイアンが「ふうー」と長く息を吐き出しました。

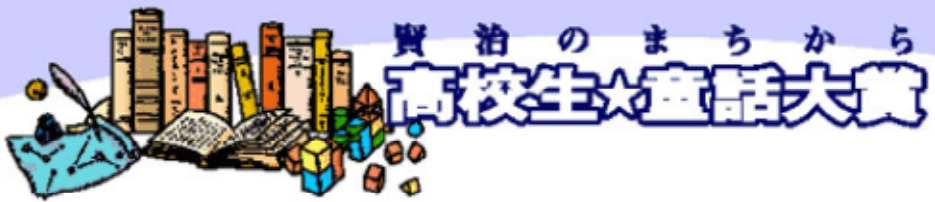
その瞬間、爆発したかのように、アイアンの全身を覆う鉄が飛び散りました。

「やった、外れたよ……アイアン?」

坊ちゃんは驚きに目を見開きました。

鉄のよろいが吹き飛んだ後、そこには馬の姿はありませんでした。鉄仮面や鉄の板、それに沢山たくさんのぜんまいや歯車やばねが転がっているばかりでした。

「アイ……アン」



やっと坊ちゃんは悟りました。アイアンは鉄を着た馬ではなく、鉄で出来た馬のカラクリだったのです。

坊ちゃんはその場でひざをつきました。

「ああ、アイアン、僕はなんてことを」

「いや、それでいいのじゃよ」

はっと顔を上げた坊ちゃんが見たのは、白いひげを足まで伸ばした老紳士でした。

ハンマーともスコップともネジ回しともつかない工具を肩に担いでいます。老紳士はばらばらにちらばったアイアンの残骸ざんがいを見わたして愛おしいとそうに言いました。

「うん、設計通りだ」

もしもアイアンがバラバラになっていなかったら、その声が泉に映った月と同じものだということに気付いたことでしょう。

「さて、どれくらい頑張ったのかな」

意味ありげにひげをしごいた老紳士は、アイアンの破片を拾い上げました。それはあの背中にあつた、アイアンがかゆがっていた鞍のような形をした鉄板でした。

坊ちゃんはそこを叩いてやった時のアイアンの嬉しうれそうな声を思い出し、思わず泣きそうになりました。

「これは素晴らしい。ほら、見てごらん」

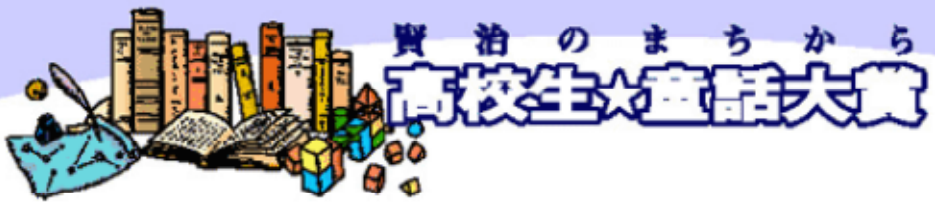
白ひげの老紳士がぐるりと鉄板を裏返すと、そこには植物の苗が生えていました。アイアンがかゆがっていたのは、この苗の根が伸びていた為でした。

「これはわしが砂漠化に対抗して品種改良した強い苗だ。だが、発芽させるにはとてつもなく時間がかかるし、それ以上にデリケートだ。暑い日も雨の日も風の日も、適度に自然にさらし続けなくてはいけないのだよ」

「ということは……」

「そうじゃ、この苗は、アイアンの体内でのみ育つことができたのだよ。アイアンが見守り役を続けたからこそ、この希望の苗が生まれたのじゃ」

苗を食い入るように見つめる坊ちゃんに、白ひげの老紳士、隣国の設計技師は優しく言いました。



「この苗は強い心を持っている。なにせ長い時間をかけて鉄に育てられたのだからな。この国の緑を取り戻すだけでなく、世界中に広がり、人々の暮らしを助けるだろう。だが、それを助ける人が必要だ」

坊ちゃんは迷わず答えました。

「僕がやります。体を鍛えてアイアンの苗を世界中で育てます」

その瞳には力強さが宿っていました。

「ほっほ、ではわしもバラバラになったこいつを直せるか挑戦してみるとするか、何年かかるか競争じゃのう」

「はい、僕も負けませんよ」

坊ちゃんが苗を見つめると、それは風もないのにふわりと揺れたのでした。